

## 「いくつもの壁を乗り越えて」

(E. O. 主婦)

突然、高度難聴になりその後から完全に失聴した中途失聴者です。20年以上も前のことになり  
ます。原因も治療法もわからず、突然聞こえなくなった自分の状況を長い間受け入れることがで  
きず、一人悩み苦しんでいました。

どんな表現を持ってきても、そのときのショックは表すことが出来ません。「聞こえないこと」  
がどんなことなのか、それが次第にわかってはきましたが、それでも簡単には障害を受け入れる  
ことはできませんでした。

聞こえないという思いは自分にとって精神的に大きな負担になりました。家族との会話が成り  
立たず、どこに行っても何も出来ない、分からない状態なのです。これで人間としての価値があ  
るのかとまで思いつめた時期があって、思い出すのも辛い日々を過ごしていました。

しかし時が経つにつれ、情報を掴み、自分にあったコミュニケーションの方法を探りながら、  
周りにも、こうしてほしいときちんと言えるようになってきました。そのあたりから自分の障害  
と向き合うことが出来たのかな、と思っています。

中途失聴という聴覚の障害は、普通に話すことが出来ますし、外見ではわからないことが一番  
の問題です。だから、いつでも自分から説明をしていかなければ相手にはわかってもらえません。  
誤解を受けて嫌な思いをすることなんて日常茶飯事。外に出れば後ろから来る自転車のベル、車  
の音、クラクションがわからずに危険な思いをし、怪我をした経験も少なくありません。

「聞こえません、書いてください」のこの一言が言えるまで何年かかったことでしょう。長い  
年月の間に、多くの仲間と出会い、知識も増えました。いまだに壁はいくつも私の前に立ちはだ  
かって来るけれど、うまくかわしながらやっていくしかありません。仲間の支えも大きなもので、  
それがあったから今自分が生きていると言っても過言ではありません。自分にあった情報や知識  
をうまく利用すること、それが自分自身のリハビリとなり、前向きな気持ちにさせてくれます。  
だからこそ、今、聞こえで悩んでいる方たちに情報をお届けしたい、仲間作りを進めたいと切実  
に思います。

自分の生きる道を探りながらも、決して聞こえないことに甘えることなく、負けることもなく  
生きて行きたい。また、程度の違いはあれ、生活の不便は聞きにくい人すべての共通の問題です。  
身体障害者手帳がなくても、本当に困っているという自己申告でも日常生活用具の給付を受けら  
れるようになればいいのに。手帳をもらえる基準なんて、本当はいらないと思っています。その  
先に誰もが安心して生活できる社会があるのではないかと思うのですが。

## 『障害者』ではないけれど

(寺田 翔 専門学校生<社会福祉専攻>)

1983年、東京に生まれた私は、病気の影響により物心ついたときから、感音性中等度難聴です。両耳平均55デシベルで、特に高音部が聞こえづらい状態です。近距離での会話は可能ですが、距離があると聞き取れないことや聞き間違いが多くなります。

私の聴覚レベルは、日本の障害基準では聴覚障害に該当しないものの、WHO基準になると該当する、いわゆる「グレーゾーン」にあたります。難聴は千差万別ではありますが、以下、私の実体験とそれに対する考えを述べていきます。

まず、最近病院で起こった出来事を挙げます。受付の方が「〇〇さん」と発したときのことです。「〇〇」が聞き取れず、しばらく経っても誰も立ち上がらないため「自分のことだったのかな？」と思い確認しに行きました。すると、「あ、タナカさんですか？」と問われました。「あーまた間違えた」と思いながら、「いいえ、テラダです」と答えます。これで不可思議なコミュニケーションが成立します。

これだけ見れば、ただ聞き間違えただけで、問題ないように見えるかもしれませんが、「これこそが問題」であると私は考えます。なぜなら、私と同レベルの難聴者の生活では「常に」上述した出来事が起きているからです。

当然仕事でも同じです。電話取り次ぎや会議での「聞き間違い」、上司・同僚からの質問が「聞き取れない」など、数多くの問題が存在します。私の聴覚レベルですと、大きめの声で話してもらったり、何度か繰り返してもらわなければ、「正確な」コミュニケーションを取ることができません。問題なく対応してくれる方もいるのですが、明らかに不機嫌になる方もいます。自分自身への不甲斐なさや不全感・孤独感など、正直「精神的」に辛いのです。

上述したように、現在の日本の障害基準では私は障害者ではありません。しかし、実際の社会生活ではどうかというと、明らかな「障害」を感じ、少なからずの矛盾を感じています。「健常者でもなく障害者でもない。では自分は何なのだろう？」といったアイデンティティの拡散も度々起こり、日本の障害基準に関しては疑問を抱いています。

そういった意味でも、現在内閣府にて行われている、法改正に伴う障害者制度改革推進会議が良い方向に進むことを期待したいと思います。

## 「私ひとりじゃないんだ」

(小島 敦子 特定非営利活動法人東京都中途失聴・難聴者協会理事)

私が難聴だと気づいたのは10歳の頃です。補聴器を必要とするほどではなかったため普通学校に通い、両親も私も聴覚障害については何の知識もないまま時を重ねました。

28歳で結婚、その後2女1男に恵まれました。2度目の出産の後、夫からの指摘で初めて聴力検査を受けたのです。結果は身体障害者4級でした。その後14年かけ聴力は少しずつ落ちていきましたが、ある日突然失聴。2級となり現在に至っています。

私は、身体障害者手帳取得以前から難聴でしたが、手帳もなく普通に就職し職場では、繰り返し聞き返す私に上司はイライラし、当り散らされることは日常茶飯事でした。つけられたあだ名はボンツー。逆から読めば意味はわかりますよね。補聴器を使用すれば聞こえるという社会の思い込みや、聞こえないことに引け目を感じ、辛さに耐えられなくなり退職しました。今でもそのトラウマからは抜け切れません。

4級の認定を受けた後、1年に1度、聴力検査を受けていました。少しずつ下がる聴力に、近い将来失聴するのだろうという予測もでき、自分自身は心構えと覚悟をしてきていたつもりでした。しかし想像と現実とは全く異なりました。完全に失聴してもはっきりと発音ができる私に、周りの人からは「聞こえないなら喋れないはず。ちゃんと喋れるのだから聞こえないのではなく人の話を理解する能力がないだけだ」と言われたり、筆談を願うと「字が汚いから。漢字が苦手だから」（私はひらがなでも構わないから情報がほしいのに…）と断られることもあれば、「大丈夫、大丈夫」と言って喋り続けられたこともありましたが（書かなくとも大丈夫という事らしいですが…?）。夫は、手話を習いたいと言う私に「みっともない」と反対をしました。人に限らず、駅のホームや電車の中でのアナウンスなど、聞こえない人がいることを想定していない社会に疲れ、死を考える日々が2年間続きました。

分岐点となったのは、当時5歳だった息子の存在です。当時、文字が読めてもまだ書くことができなかつた息子は、トイレに貼ってあった「指文字表」を覚え一生懸命私との会話を試みました。

そして、もう一つは同時期に夫に内緒で通い始めた手話の講習会でした。

まず驚いたのは講師と助手の方も同じ聴覚障害を持っているという事。聞こえなくても講師になれる事でした。そして、私たち生徒と同じように、悩み、苦しみ、挫折も経験し、また乗り越えてきた方々だということでした。私は「あゝ…私ひとりじゃないんだ。」と涙があふれ、聞こえないということはなんて孤独だったんだろうとあらためて実感しました。

週に1回、2時間の講義には、毎週早く行っては互いに復習し教え合い、終了後はお茶のみ交流をしました。少しずつ手話を覚え、コミュニケーションができてくると、聞こえていたころと同じようなりズムと速さで会話ができる喜び「言葉のキャッチボール」ができる事に感動しました。同じ悩みを持つ同障者たちと手話を学ぶ事によって家庭でも笑顔が増えていき、さまざまな

引け目や遠慮から解放されていきました。「もっと早くに手話に通わせればよかった」と反省した夫。手話講習会は手話を学ぶだけではなく、医者にもできない『心のリハビリのできる場』なのだと思います。

講習会で東京都中途失聴・難聴者協会のことを知り、聞こえないことの不便さを共有している方々との交流が広まりました。今まで「私なんて無理」とさまざまなことに臆していた私ですが、「私にもできるかも」と思うようになり、失意のどん底から救っていただいた恩返しの意味を込めて、そして、こんな私でもできる事があるならお手伝いさせていただきたいと思いで、現在は協会活動に携わらせていただいています。さらに地域でも同じように悩んでいる方を掘り起こして手話講習会を薦めたり、聴覚障害者のための情報提供にも力を入れています。

中途失聴・難聴者は見た目では全く分かりません。きちんとした発音でもまったく聞こえない人がいる事、高齢になってから聞こえなくなった人は手話のできない人が多いという事を社会の皆さんに是非知っていただきたいと思います。このような発表の機会を与えてくださってありがとうございました。

## 「豊かなコミュニケーション文化を広げよう」

(福田 能文 特定非営利活動法人東京都中途失聴・難聴者協会理事)

1971 年生まれの私は、10 歳のころから少しずつ聴力が低下。大学生の時の検査でアルポート症候群と診断されました。父親も難聴です。現在の私は両耳 90 デシベルの感音性難聴で、低音域から中音域が聞きにくく、補聴器の調整が難しい状態です。

私が補聴器を使用し始めたのは高校 1 年生の時です。県下のバスケットボール部に所属していましたが、顧問の先生の感情によって、練習内容がきつくなることがありました。上手くコミュニケーションが取れないことで先生の機嫌を損なうことを恐れた先輩から「補聴器つけろ！」と言われました。しかし私は障害を受容できず、補聴器の調整も難航し、先輩たちとの軋轢がエスカレート。居場所をなくし、退部することになりました。

一般の人たちからは、補聴器を付ければ、あるいは声や音が大きければ聞こえるのだろうと思われるのかもしれませんが。しかし現実はそのに程遠く、聞きたくても聞こえない、葛藤と不自由を抱えたままなのです。

大学 2 年の時、高校の先生に誘われて、とちぎ YMCA のフィリピンワークキャンプに参加しました。ハンセン病患者さんのコミュニティで、現地の大学生と一緒に豚小屋を建て、患者さんの経済的自立を支援するボランティア活動を行いました。日本では、私が聞き取れないときに聞き返すと嫌な顔をされ、聞き返すのが億劫になっていました。しかし、フィリピンでは違っていました。彼らは地面に文字を書いたり、掌や背中にスペリングしたり、私が分かるまで何度も何度も言い返してきました。こっちが聞き疲れて聞こえたフリをしてもすぐにバレてしまい、わかるまで、伝わるまでメッセージを送ってきました。こんな体験は初めてでした。豊かなコミュニケーションの中で、フィリピン人は家族や友情を大切に、とてもうらやましく思いました。フィリピン人は経済的には貧しいけれど心はとても豊かだと思いました。ボランティアをしに行ったのに、私が逆にボランティアされ、勇気を貰い、そこから自分の変革が始まりました。

日本の社会、文化は聞こえる人を中心とした世界です。聴覚障害者にはとても生きづらい世界です。聴覚障害者の自立を支援する法律や社会システムの整備も求められます。しかし聞こえることが当たり前の世界にも、「伝えよう」、「理解しよう」という豊かな気持ちのコミュニケーションと文化が浸透していけば、より平和で豊かな社会へと発展していくと思います。豊かな世界を構築していく要素を、聴覚障害者は潜在的に持っています。

コミュニケーションの大切さ、分かち合える喜びを、日本の社会に問いかけていきたいと思えます。

## 「発信することの大切さ」

(M. J. 会社員)

私は右耳が 110db (db=デシベル)、左耳が 85db の感音性難聴です。3 歳の時に原因不明で失聴しました。右耳は補聴器を付けてもはっきり聞きとれないのですが、両耳とも補聴器をつけて育ちました。コミュニケーション方法としては、補聴器をうまく使いながら口話をつけて話しています。ある程度は話せるけれど聞こえないのです。補聴器を外して話すと、がらり！と声が変わってしまいます。つまり、私は補聴器を使いこなしているつもりで、補聴器は自分の命の次に大切なものなのです (笑)。

技術が進歩するとよりよい生活を求めて、自分の聞こえの手助けとなる福祉支援機器もいろいろと増えていきました。昔はアナログ型補聴器を使っていましたが、現在はデジタル型補聴器を使っています。しかし切り換えてからしばらくは、その進歩についていけなかったのか？精神的に苦しくなり、満足のいく聞こえが得られるまで慣れるのに 1 年間かかりました。補聴器を付けて育ってきた私にとっては 2 度目のリハビリだったのではないかと思っています。

その補聴器に慣れてきたところで、次に FM 補聴システムを購入しました。今は会社の会議などに使用しています。誤解しないで欲しいことは、このような補聴支援機器があるから、話していることがすべて分かるか？と言うと…そうでもないということです。

私たちはニュースなど媒体を通して情報を掴もうとしますが、自分の聞こえについてはどうでしょうか？補聴器や補聴支援機器、情報保障として要約筆記を使っていることを、それらを知らない方に説明できる人は少ないと思います。つらい思いをしないためにも、いろんな知識を身につけ、広く情報を発信する必要もあるのではないかと考えています。障害者が社会の中で生きていくことは大変なことです。難聴者・中途失聴者たちは、経験を通して良かったことや悲しかったこと、失敗して悔しかったことなど、社会へ向けて積極的に声を出して欲しいと私は心から願っています。